

高千穂大学バンキング研究会〔代表〕原 司郎
〔編者〕橋本光憲〔共同研究代表者〕宮坂恒治

『1970年以降のわが国における金融仲介』

(エルコ・2002年・本体2,500円)

TAC(株)証券アナリスト講座専任講師 前 田 拓 生

目次・分担

はじめに 共同研究レジュメ 序言

原 司郎

第1章 1970年以降の日本の金融仲介機関 シェア

前田拓生

第2章 資金需要構造の変化に伴う金融機 関の仲介機能の変化

同前, 村山茂高

第3章 金融仲介機能と中小企業金融

平松知実

第4章 家計と金融機関との関係

大野早苗

第5章 国民福祉水準向上への寄与

橋本光憲

第6章 金融機関によるモニター機能

同前

第7章 情報生産機能としての信用リスク 審査

杉本正隆

第8章 わが国の銀行融資における担保

宮坂恒治

第9章 自己資本(比率)規制と金融仲介 機関における自己資本の意義

同前

第10章 金融仲介機関の健全性確保

北井 修, 川口麻子

現在、銀行経営に関する研究論文は多いものの、銀行機能の重要性に注目した議論については極めて少ないように思われる。むしろ、銀行業はデイスインターミディエーションの進展とともに衰退産業になり、

金融システムも“bank-based system”から脱却すべきであるという研究が多く見られる。そのような中、この書の中心的な議論は、銀行そのものの機能について、特にモニタリング機能についての研究に向けられている。しかも、この書は銀行にとって最も重要な機能は「顧客に対するモニタリングである」と位置付けることで、「銀行にとって『モニタリング』とは何か」という問いに対して正面から取り組んでいることに特徴がある。

また、第二の特徴としては、若手研究者がマクロ・ミクロ両面の経済ツールを使うことで、日本の金融機関、特に銀行の役割を明確にするとともに、大手都市銀行の支店長経験者でもある宮坂・橋本両教授が銀行経営論研究者としての視点から、現在日本の銀行経営について定量的および定性的な分析を行うことで一つのまとまった研究成果が生まれていることであろう。つまり、若手の研究者はその得意とする分野で研究成果を出すべく最大限の努力をし、そのユニークさを研究成果として著されていると思われる。しかも、それらの成果を1冊の研究論文として、また、現在の銀行経営に対して示唆あるものに仕上げた宮坂・橋本両教授の見識の深さを感じる書でもある。

以下では具体的な章立てとそれぞれの注目点について簡単に触れておく。

第1章から第3章では、わが国の金融仲介機関についてマクロ経済データを駆使し

て分析するとともに、日本の中小金融に対する金融仲介機関の状況についてまとめられている。特に1章では、この書の起点的な論文である Goldsmith によって書かれた『*Financial Intermediaries in the American Economy since 1900*』(1958)の研究手法を日本のマクロ経済指標によって検証したうえで、独自の分析手法を用いて研究成果をあげていると考える。

第4章では、預金面での分析として金融論におけるミクロ経済の基礎理論である異時点間消費モデルおよびポートフォリオ理論(C-CAPM)に基づき、家計と金融機関との関わりについて理論的分析し、その歴史的検証にも触れている。この研究は現在の消費者行動の代表的な分析手法を使用しつつも、きわめて平易な文章により綴られた点でも優れている。さらに、理論的な検証において一貫性があり、独立した論文としても十分に価値の高いものであると考える。

次の5章・6章は、この書の中心的な議論である「銀行のモニタリング機能」について研究している章である。ただ、5章では直接的に「モニタリング機能」を論じるのではなく、銀行の公共性に根ざした「福祉金融」と健全化・効率主義的銀行経営の両立について考察することで、銀行経営の真の姿を描きつつ、米国との対比として将来の日本における銀行像に迫ろうとしている。そして、5章を踏まえて6章においてはこの書の核心部分である「銀行のモニタリング機能」に触れ、今後の課題についても考察している。

続く7章では、金融機関の行動をミクロ経済のツールを使ってモデル的に簡潔にしかもわかりやすく考察されている。一般に、この分野の研究では数式だけが先行する傾向があるが、この論文では数式によるもの

は最小限に留め、できるだけ具体的な事象について理論的解釈を施すべく配慮されている点でも評価できる。

ここまでの議論は日本型銀行経営の理想についての研究に近い議論がなされていたが、実質的に最終章にあたる8章・9章では、銀行経営の理想と現実のギャップについて詳しく分析している。特に、定量的な手法を駆使しながら現実の銀行経営の実態を明らかにしつつ、グローバリゼーションの矛盾点や担保主義についての妥当性、中小金融機関の行政についての課題など、銀行経営におけるさまざまな現実の問題点について鋭く考察するとともに、解決策についても理論的に解説されている。

その後、補論的に10章が設けられているが、第1節の「規制の経済理論」では、銀行規制に対してゲーム理論を取り入れ分析するという先進的な試みがなされ、第2節の「預金保険機構の機能変化」では、来年にペイオフ全面解禁を控え、今日的な議論としても有意義であり、預金保険機構について歴史的検証をしている論文として一読の価値があると思われる。

以上のように、各々の論文は独立して十分に価値のある研究成果であるが、宮坂・橋本両教授の力によって、一つの研究論文としての体裁が整っている。加えて、研究の底流においては、「地域金融」の研究においても第一人者である原 司郎教授の「銀行の公共性」に関する考え方が流れていることを感じる書でもある。

TAC(株)はジャスダック上場企業です。